

や遺品は持って帰さないとわれ、残念だった。

一週間程シベリア鉄道に乗りナホトカに着いた。

この幕舎で約一カ月、埠頭造りの山からの土運び、夜は共産党の勉強を強制的にさせられ、スターリンに感謝の署名をさせられた。

民主化の足りない部隊は労働収容所へ逆戻り
(民主化グループにより)。

いよいよ日の丸を掲げた明優丸が入港、我々が乗船である。名前を呼ばれタラップに足をかける。これで初めて安心して日本に帰れる。

抑留記

岐阜県 増倉 勇

日本の敗戦を知ったのは、北朝鮮と中国の国境付近の山中であった。

北朝鮮の羅南において新設師団が編成され、師団の任務が北朝鮮の山中に陣地を構築するためであった。

山に入って陣地構築にかかる前に無条件降伏が知らされたため山を下り、とある朝鮮部落に宿営した。どの位居たか記憶は無い。時節は八月の暑い盛りで付近の川で涼をいやしてはいたものの、この先どうなるのやらさっぱり分からず、場所が北朝鮮でソ連の支配下であって、近くソ連兵による武装解除があるからとて、武器は全部取り上げられ丸裸となった。兵隊が武器を無くした折の心細いことと、さみしい事はない。今まで、日本軍として君臨し、住民も一目も二目も置いていたも

のが敗戦と同時に、その態度ががらりと変わって冷たい反感の目で見るようになった。ともかくこの先日本に帰れるのかどうか見当も分からず、幾日いたか定かでないが、不安な日々を部隊全員が送っていた。

そうこうするうちにソ連兵が来て、日本に「ダモイ(帰れる)」と言って来たので皆喜んで支度を整え、言われるままに隊列を組み徒歩でこれに従った。

いまだどこに行くのか分からなかった行軍の途中、小屋の土間にむしろ一枚を敷きその上に寝たりして着いた所が清新の港であった。そこから船に乗った折、やれこれで内地に帰れると皆喜んでものだった。

甲板に出て島を見ると、日本に帰るならば朝鮮半島が右に見えねばならないのに、島が左に見える。これは少し変だと思っていた所、果たせるかな船はソ連領の「ナホトカ港」に入った。

そこでソ連に連れて来られうまくだまされた事

に気づき、これは大変なことになったが今更にいかに思ってみても致し方がない。うまくだまされ捕虜が確定となってしまった。

船から降ろされ列を組んで、周りは銃を持ったソ連兵が警戒し、徒歩で連行された。地理も場所も皆自分から知らない他国の事とて逃げるわけにも行かず、何日歩いたか記憶には無いが、そのうち周囲に鉄条網を張りめぐらし、四隅に監視塔のある相当数のバラック家屋がある場所に到着した。

バラックの中に入ると二段になった木製のベッドがぎっしり並んでいた。どうもここが我々の入るラーゲリ(収容所)かと思った。

その折の編成は、将校がどこに行ったか分からない。下士官が長となって十人位の班に分けられ、一応そこに落ち着いた。食事たるや誠にお粗末で、パインアップルの空缶一個が各自に渡され、その中味たるや缶の底に数える程の小豆のみで、その他は水、それが与えられた一食分で一日三回。そのうち一回黒パン一個(三五〇グラム)が与えら

れた。

最初の体力のあるうちはよかったものの、次第に体力がなくなってきた。加うるに、労働は過酷であり、各班ごとに毎日作業に出て鉄道建設、山の伐採、石材割り、家の建築等々あらゆる作業に刈り出され、かつ作業はノルマを課せられたが、何しろ次第に体力も衰え力も出ない状態で、ノルマなぞ遂行することはできない。それにもかかわらず相手は、仕事が悪い（プロハラボーター）、悪い仕事と言って作業に追う。そのうち体力のない者は栄養失調となって顔がふくれ、遂には死んでいった者もあった。だがその死者はどこに埋められたか、何人死んだかは皆目判らなかった。

過酷な作業は強いられ、食べ物は前述の状態で、その毎日が生命の不安と空腹、作業の思いのみで、他の事柄は総じて頭になかった。

ある日、収容所に移動があり、私も移動する事となった。

第二の収容所に行ったのは、あまり大きくない国営の鋳物工場であって、その中に四百人位を収容できるラーゲリであった。ここは二段ベッドではなく、皆一列に並んで寝ていた。

抑留者の中で鋳物の経験者を集めたものと思われる。この者は、昼間工場に行き鋳物の仕事をし、その他の者は雑役の仕事をした。

この収容所は少し食事の状態も良くなり、三食三五〇グラムの黒パンが与えられた。工場はソ連人の労働者も多数おり、その食事ぶりを見ると、やはり三五〇グラムの黒パン一個にカルトシカ（ジャガ芋）数個、ヤギの乳をガラス瓶に入れて持って来て、それが一食分であって誠にお粗末であった。

ソ連も独ソ戦によって食料事情が最悪の時であったと思っただ。

いずれにせよ、満腹感を味わうまでには到底到らず、常時腹をへらす毎日であった。

この収容所に来てからの唯一の楽しみは、工場の経営している農場（コルホーズ）に作業に行く折である。工場から数キロ離れた農場には二台の貨物自動車に乗せられて運ばれ、農作物の種をまいたり収穫したりした。

農場はカルトーシカが主体で、短い夏の間、大豆、トウモロコシ、ニンジン、カボチャ、ウリ等々があつて、食べられる物は何でも食べる。ニンジン、カボチャ等は焼いて食べ、大豆は炒つて食べ、わけてもジャガ芋は大きな鍋で茹で、皆に腹いっぱい食べさせてくれる。抑留者はこの時とばかり食べられる物は何でも腹に入れ、食べた物がのどまでつかえる程食したものだ、それでもまだ食べ足りない。びろろな事であるが、一日大便を二、三回する程であつた。これが俗に言う餓鬼道なるものかと思つた。農場に行くのは毎日でなく交代に行くため、前記のごとき状態である。

この工場にどの位いたか覚えがないが、又はや

三回目の収容所に行くこととなつた。この収容所は特殊ラーグリー（後で判つた）と言つて、日本において公務員であつた者、軍関係者のみを収容した所であつた。この作業は炭坑作業が主体で、それ以外の作業もあつた。

その毎日が抑留者である事とて命の補償はなく、ただ、無気力で作業をすることと腹を満たす事のみで頭の中がいつぱいで、他の事は何も思つた事はなかつた。

炭坑は一番、二番、三番方の交代で、エレベーターで坑内に行つたに違いない。ともかく収容所を引き揚げる日は不安がある一方、うれしくてわくわくしたものである。

一同は収容所をさらばして貨物列車に乗りナホトカに向かつた。ナホトカに着いても、いつ元に戻れと言われるやも知れず、いまだ不安の念を去る事はできなかった。それから程なく船に乗るよう指示があり、待機していた日本の貨物船「山澄

丸」最後二隻目に乗ることができ得た。ここに来て初めて間違いなく祖国に帰る事ができると確信し、一度に体の力が抜ける心地がした。

そして船が港を出、舞鶴港に入港し、祖国帰還の第一歩を印した。

そのの棧橋で婦人会の心づくしのさつまいも一個のうまかった事は、いまだに忘れられない。

今思うと、よくぞ三年有余の抑留生活を生き抜いて来たもの、我ながら奇跡であったと思う。これも、神仏の加護のたまものと感謝している昨今である。

回顧

静岡県 市川 柁夫

「働かざる者は食うべからず」社会主義社会のスローガンの許に、日夜の別なく、独裁者スターリンの意のままに、ひたすら私達は飢えと寒さと闘いながら祖国日本に帰る日を信じて精根尽き果てるまで、死闘とでも申しましょうか、人間の限界に挑んで参りました。今日という日を迎え、はや五十有余年の年月を経過しました。しかし、今改めて過去を振り返って、共に枕を並べた幾多の戦友が、あの極寒の地に、未だ雪、雨、風の嵐の下に帰りたくとも帰れないでいる事を思う時、本当に胸の熱くなるを覚えます。

昭和十九（一九四四）年の十月召集されて現役兵として、北満の地、東寧の第九二九部隊に入隊を致しました。冬の厳しい北満の寒さは、初年兵最初の年で本当に身体の堪えられない感じでした。